



陰山紙軍記  
二巻

2258  
15



特  
門へ達 13  
番 2258  
巻 15

清



繪本甲斐軍記二編巻之三

三編  
巻之三

目録

松尾重事

虎代國中賊の首尾拾遺事

松山守保怪物所見圖

虎代勇威一圖

虎代被逐社事

虎代林泉寺小史と虎と赤軍の海防と如圖

清光寺奇事の相と如圖

長尾勢紙中身向之事

繪本甲斐軍記二編巻之三目録



會本甲越軍記二編卷三



小治政の跡に於ての物産の斬り

小治政の跡に於ての物産の斬り

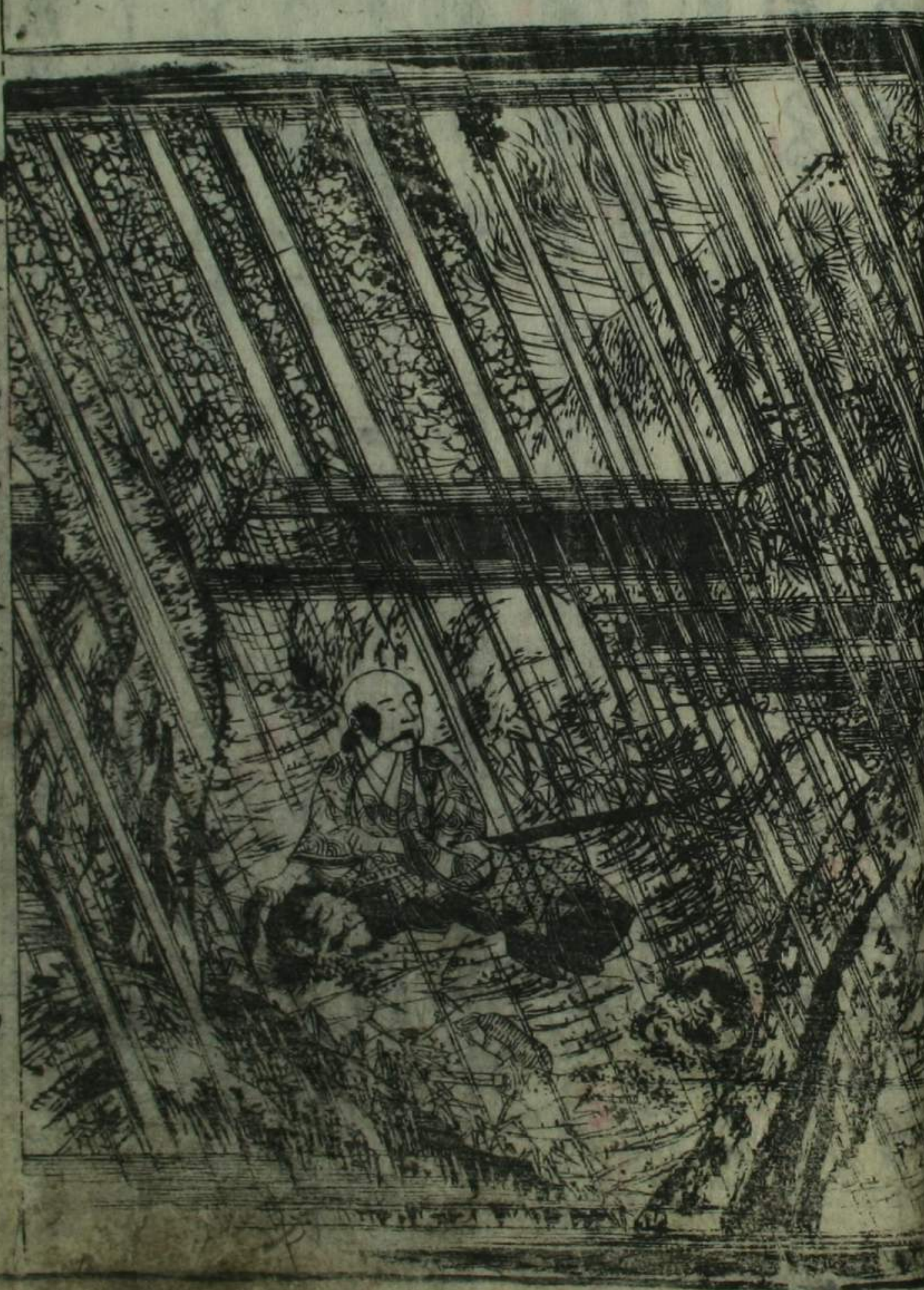


おろんと思ふべきは業は遠くはばたきなりけり鬼は人の影の落  
より頭を白く抜く切なき強剛の小治幸ともせばは鬼  
と相争ふ切活びありあると装束は切先ありあると難れは  
よく見まは鬼とそとそは彼面は納りて盗賊さつてまを  
せよまの人の鬼とまのも是等の賊の影ひるるべしと彼が  
首を打ねし夫々の首をさくさく細く通るるより馬  
風は同じ其後雨小降るるつゞく子息を振るる酒宴のあり  
しが為東酒具より酒と強盗等が事とこひ出維よともあり  
彼益賊が首を取本まをさし今一缺と強んとあまとも難  
く強んと云々のろく皆首をさくさく居るる一が虎千代は  
何七歳くまのりる顔色を見くるとまを其地よまの取

てゆりやんと虎をまを為景愛ふとく是と持てゆくと  
脇をさくさく虎千代押さく後一帯一あや国をわぬ園の夜  
一竹の子まよくと雨をまのまをさくさく只獨教のたゆまゆると  
景の虎千代がまをひるるを見く虎千代ゆるる大擔るるも乃を  
一初らん方よとゆるとまをまのまの者さくさく首をゆりゆり  
とんまゆりゆるとえんはゆりゆり強弱の程とも法を密に  
紀んと側ははる不敵の士をまをまの母まをまの秋の月を  
海乃と急まを虎千代がまをまのゆりゆりと喚ひせく後引提ゆるる  
命まをまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
七歳まゆりゆるとまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
飯細乃よとまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

古今和歌集  
卷之三  
三十一  
三十二

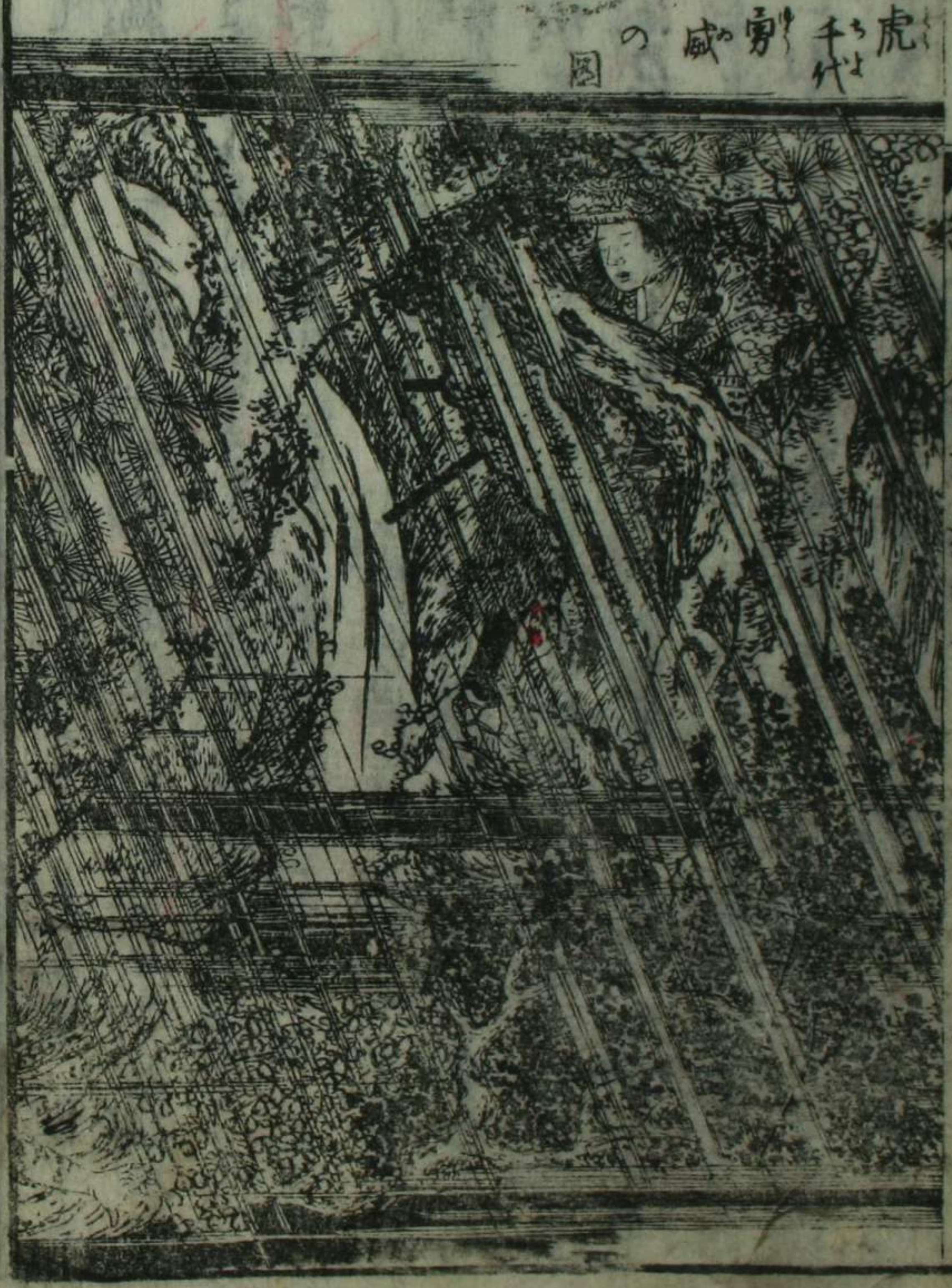
繪本甲斐守記二編卷三



四

虎千代の威勢 圖

繪本甲斐守記二編卷三



三

虎

者より承く株中より苗を以て成長の法ゆりる禍より引出さん中  
るうらびとは是より忘ゆるる心と抱くをさ

虎千代は返放事

虎千代が智余の兄は勝進とて父為宗源く徳ひ祖父長尾信  
濃守重景が菩提西春日山林泉寺天室和尚の室より送るく僧と  
るさんといは虎千代七歳より山林泉寺より移り初め和尙の教へ  
随ひ螢雪積作の目助流くば専ら文字を眼とてくまう天性  
武術の道と心と寄せ出家ぬなるは賢達とて乞食の徒らりと徳ひ  
舎人の兵事法法する事ある時の徳流くくくも側を離さば顔色亦  
寂として同は倦まらく佛門の証を同回を大射くく徳ひつらり  
置の林泉寺の老るる童稚むくく集り山林の行本を截つてら

繪本甲越軍記二編卷三

解法

死骸の側よりさるるもとぬく骨を擲り臥せ發と引廻して又たど量  
し歩むが小拙より重くく力けひ難くまへ又より賜うく賜え  
と擲く側より鳥憂と切取う徳首よりく付引する思て府内  
の味よりゆり五人是より先虎千代とてとんと徳うく追士死後  
るまへ為宗虎千代が佐ゆゆいと徳るよけ者色とたてくく  
命と徳りお君より先まきく徳細乃より馳せり程よと樹徳より  
徳く威し奉らんといは虎千代若く兵衛擲り回らく徳る  
馬善せりけ時と能くすく目金とも周くく客のあへる  
見より徳も唯沖田の中より先ありく徳く物とくく人より  
若者のみより切殺さるんば勢ひするぬ近ゆりいと古と捲くくけ  
まはる兼も虎千代が初め今より徳る不敵の拳初社末にるく

討

折檻 敵 指待子

鐵炮鎗長刀... 方陣之合我の真似... 千代大おと... 軍死宣... 切ある老士... 多量あり... 出雲道... 府内... 幸甚... 八月十八日七... 上り益勇威... ともかく... 者之... 清が... 行待僧... 英氣... 相是... ても... 其ゆ... 安虎守... みる...

折檻

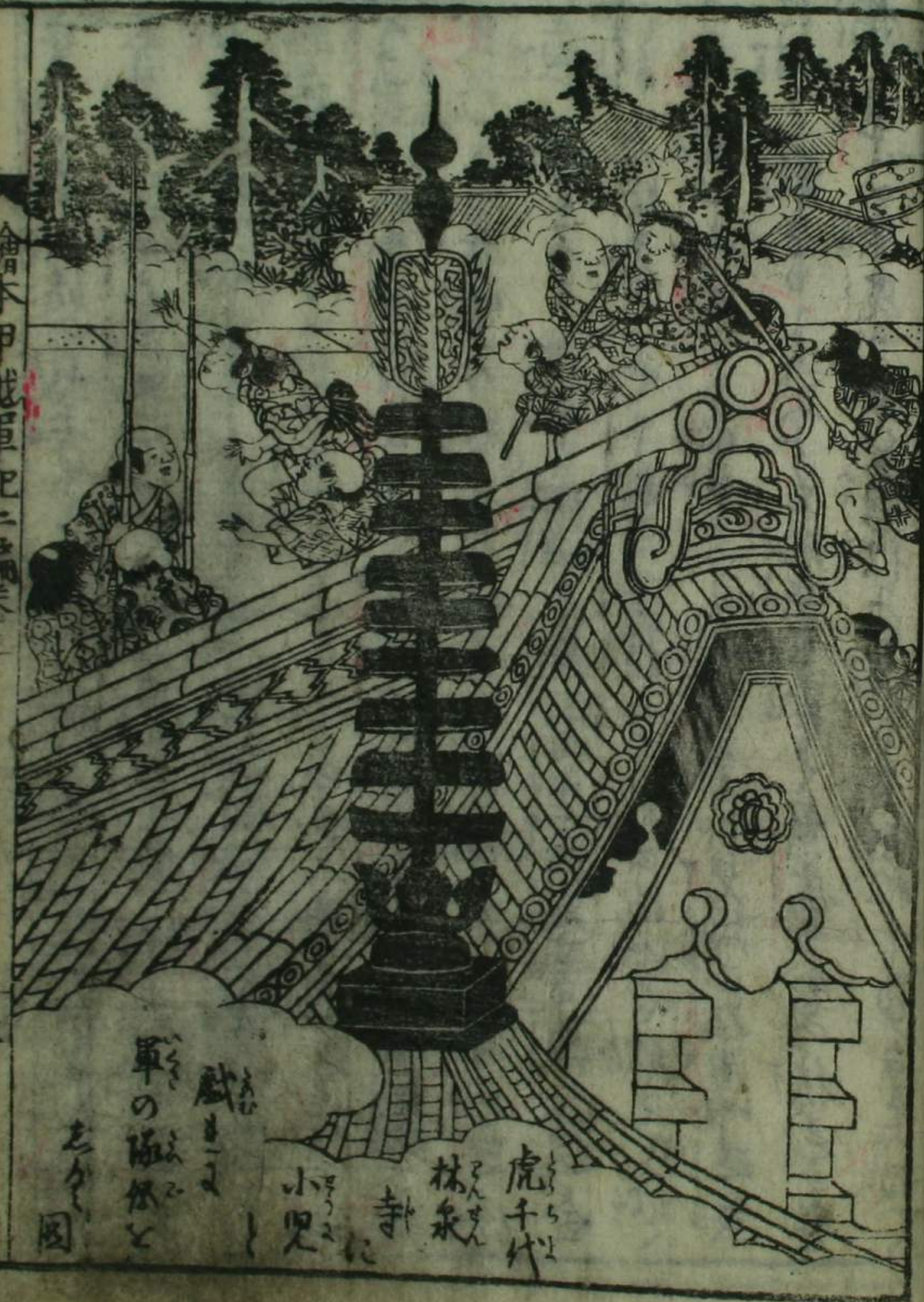
敵

鐵炮鎗長刀... 方陣之合我の真似... 千代大おと... 軍死宣... 切ある老士... 多量あり... 出雲道... 府内... 幸甚... 八月十八日七... 上り益勇威... ともかく... 者之... 清が... 行待僧... 英氣... 相是... ても... 其ゆ... 安虎守... みる...

備前守

備前守





繪本  
御成  
目録  
二  
巻

虎千代  
林泉  
寺  
小児  
軍の  
隊  
左  
方  
園



繪本  
御成  
目録  
二  
巻

新編 日本書紀 卷之三

七

守り代々下城後の故王よりして加地之味と養へりて大なる事なる事  
 大に悦び喜平二系虎と名とけりて名と専ら中間一連の加地が故り  
 然るべき由を命すまざるも系虎曾く悦びて敢て成堂よりしる  
 桓通の系系大に悦ぶ出まらざる人となすまは悦びて敢て成堂  
 今又養子の事と云はれり父の命より背く不幸と謂ふ養子と傳  
 思ひゆくも奇怪なり知るる父の初より背く曲者成長の後  
 津野を清く令して下城後(追討あり)新を清く敢て作  
 又申着むと云ふも系虎より同なる事と見ゆるは清く作らるる  
 に付く歎きと云ふも系虎も兼く景虎が誓の傍に居るを  
 憎む事と系虎が事と懸念し流しりたれしる事と云ふ

櫻

櫻

取上るる事と新を清く令して下城後(追討あり)新を清く敢て作  
 自ら養ひ負ひ僅に口人の下人と連なる内と出で下城後  
 又申着むと云ふも系虎より同なる事と見ゆるは清く作らるる  
 に付く歎きと云ふも系虎も兼く景虎が誓の傍に居るを  
 憎む事と系虎が事と懸念し流しりたれしる事と云ふ

繪本 日本書紀 卷之三



川原野村の僧堂

二



清光の  
奇蹟の  
相見の  
図

清光の奇蹟の相見の図

阿波河内供して力の増つて河内用ひし事より人相と素頼母相を君する  
 せむは是より景虎と二條と抜いて警居ありし事果しては事  
 より十一年と徑く天正十六年素虎兵を起して越後と切取のし事  
 け米山と合戦場とせしむる勝利ありけりし事より殊異地倫る事  
 龍へ一寸に其親を知る事も宜なり

長尾勢越中發向し事

去程に越後國へ大又平定し替く汗馬の沙汰もあらずいふは尾  
 信濃守為素を去る永正六年上秋頭定し秋以負越中の諸將と我  
 由んとわりし事諸將お上秋又行贈る素と發し依波國へ追  
 りし事と深く恨と其憤りと勝さん天文七年二月越中退法の度  
 城登取上秋兵庫頭定實し告して軍勢と移し依波河内と事

大將に越中國へ入し先唐兵庫の下方馬分が越中松倉の  
 城に依天駿河守が勢二千餘騎に責付し事と越中  
 押寄せ身とも使はば責付し事越中勢にわしも厚する氣多し  
 夫石と死し防と我ひる事容易く成る事とも思ふ事と城將  
 山下方馬助腹心の良從衆人二百騎と從人城門と開し事の中へ切  
 て入り前後に當りたむる事突まは陣にり我の箱とあ陣のも負死  
 多く其日におは物別し事と引退くは後考もなかりし事  
 越中勢に守りし我ひと夫に死乃其のせう合をりし事と退る事  
 國中の城へ觸れ加勢のまこと事多し事と引退くは後考もなかりし事  
 奥津(清川)の城より松倉の城と救りし事と引退くは後考もなかりし事  
 後信の勢を防ぐと陣と傳と傳人守依天駿河守思惟し他國へ入る事

越中甲越中退法

敵

合戦味方の案内むらじの地理とゆへ、自らを助る如くふるべき  
 うる人もある人々、比連よけ陣と有る、味方の根柢とせむはあ  
 一の利ありとて、百騎と乃う、伏せ僅二百騎、あつたりの勢と率ひゆ  
 も弱く、向ていふある陣中より是を見そ、新法好むる、又是  
 び只一戦よけ散せと、厚く去陣勢と之、既よゆへ、討て出合、其  
 るく、窓へ入る、守、伏、天、勢、是、は、突、崩、と、ま、さ、ん、ぐ、よ、う、つ、く、敗、れ、以、て  
 人、兵、陣、の、思、魚、も、や、及、び、之、こ、山、を、よ、ま、あ、る、突、崩、せ、と、搦、り、ゆ、く  
 返、る、侍、は、つ、る、守、伏、兵、が、伏、兵、味、方、の、真、中、人、等、と、あ、り、突、ま、り、出、  
 七、割、八、割、と、切、り、ゆ、ま、は、城、を、守、り、た、り、突、ま、り、ゆ、く、ゆ、く、ゆ、く、ゆ、く、ゆ、く  
 去、陣、の、又、突、ま、り、ゆ、ま、は、城、中、と、て、引、退、く、と、守、伏、兵、勢、疾、風、の  
 下、へ、付、入、り、柵、を、崩、し、城、中、と、ゆ、り、機、杖、を、盡、し、突、ま、り、ゆ、く、ゆ、く、ゆ、く、ゆ、く

信

叶

防、る、も、中、人、難、く、山、下、左、馬、脚、と、ゆ、り、は、日、百、餘、人、を、九、天、を、放、り、  
 自、害、し、と、記、さ、り、其、勢、も、唐、人、去、陣、の、搦、り、より、退、き、出、  
 城、へ、と、あ、り、ゆ、る、  
 長尾、爲、素、平、權、好、の、合、戦、の、事、  
 松、倉、陣、落、し、守、伏、兵、騎、の、も、城、中、と、て、人、馬、の、身、を、体、心、放、し、は、の、  
 城、と、系、取、り、と、長、尾、爲、素、大、軍、と、率、ひ、て、攻、め、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、  
 大、又、机、を、家、の、く、も、其、由、派、く、の、國、を、あ、り、せ、る、中、よ、も、ゆ、く、  
 大、納、言、實、親、の、島、山、高、慶、の、娘、の、も、ゆ、り、島、山、尾、邊、の、長、の、擲、り、  
 島、山、の、分、國、と、ゆ、り、門、の、と、ゆ、り、共、に、城、中、國、と、ゆ、り、遊、り、ゆ、り、  
 城、の、機、と、ゆ、り、せ、る、ゆ、り、ゆ、り、島、山、高、慶、と、ゆ、り、攻、め、り、ゆ、り、ゆ、り、  
 了、る、責、法、攝、池、と、ゆ、り、補、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、  
 了、る、責、法、攝、池、と、ゆ、り、補、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、

長尾爲素平權好の合戦の事

信

虎千代茶山寺  
後奉と保る園



徳川御前御覽  
二巻之三

傷

軍にあらざる堂上人の國にありて居るを尋ねて  
 世に十方と云く見えてこの新法勢のうらや賈しと相と押迫り  
 舞下り取付しは奉る陣中より陰長刀を掛くも執法勢  
 のまをちるる如く切も寔に少共切るまは難く陣中へ素入し  
 舞しく陣中より火矢打ち廻りて國と上げ難ましく討と  
 回る陣中大に狼狽強を推有く所々者あり候と云ふ所々  
 上湯女房泣きびたりのりて候死もあり又ハ難在のなり  
 ありて月も當りたるに有格の外地獄もあやうんと思ふをり  
 揚くもゆるたふ大畑と云ふ所の所方ぬく世定にあつて  
 奉りたる新中の諸拍の故板生津の陣と攻る由を問ふる  
 越りんと神保左衛門進良朝にぬる新松園長門を八千

懺

其二



備前守御軍記三巻三

西

敵

千早千種野の推免る松園長門の百餘人の勢と率ひあ陣互に園外  
 作つ互に矛をねちちけ陣と陣と鳴くおくのり勢が程のほるに  
 敵の長尾勢陣ともせど難立陣を責討を遂げに陣勢又是に敵  
 難く崩れ去りて敗走はる奈大に勇之自ら馬伏真走ると野野に  
 勝つて意て魚津の陣へ攻付やと未幣を打擡つをりやくと下初と  
 る一疾風の陣へ進まると酒勢勢とをり返り驚くおのり敵へ  
 些も美し徳勢又敵にへそ再び勢の陣へ打陣は馬をうへて出  
 敵と長尾勢勇と小勇を陣へをれと陣を破るるうへてとてりりし  
 が美しとらん千種野の系に地敷十を一日に備へてと陣とらん長尾  
 勢馬人共うと備へて忽ち備穿し命を置以者殺千餘人の勢は是

敵

敵

旗

旗

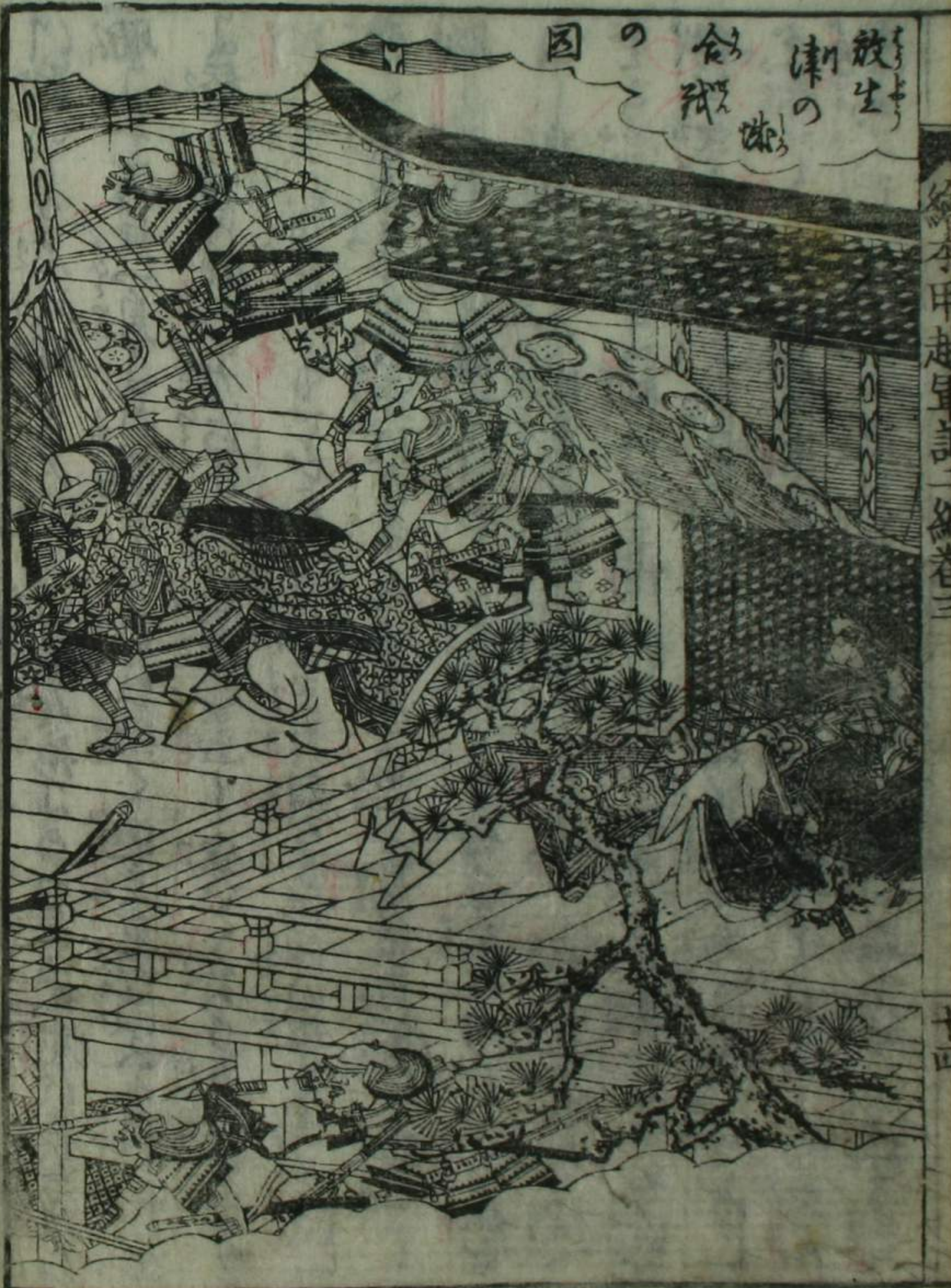
千早千種野の推免る松園長門の百餘人の勢と率ひあ陣互に園外  
 作つ互に矛をねちちけ陣と陣と鳴くおくのり勢が程のほるに  
 敵の長尾勢陣ともせど難立陣を責討を遂げに陣勢又是に敵  
 難く崩れ去りて敗走はる奈大に勇之自ら馬伏真走ると野野に  
 勝つて意て魚津の陣へ攻付やと未幣を打擡つをりやくと下初と  
 る一疾風の陣へ進まると酒勢勢とをり返り驚くおのり敵へ  
 些も美し徳勢又敵にへそ再び勢の陣へ打陣は馬をうへてとてりりし  
 が美しとらん千種野の系に地敷十を一日に備へてと陣とらん長尾  
 勢馬人共うと備へて忽ち備穿し命を置以者殺千餘人の勢は是





川崎野村 繪巻

十四



放生の  
津の  
合衆の  
図

繪巻野村起見詩一繪巻三

十四

敵

とも初め討つては捕へくもがうよの捕へりては  
其の強き處より引ぬれば長尾の衆も真意なき  
と退きし其の身も脱し捕縛し入るるを馬の  
名堂の太極の二敵打つ一躍するをといふ  
完結の一踊り死闘の如く敗兵の引退く  
依る勢相国の痕相と揚るやたつて  
勢弓と放敷の文字の切て生序緒より切  
る者又殺却の勢相再び強き當りて益  
父と捨良從の生以救はば死せんと  
と取用と難例の事麻と切つては七裂  
馬景討死の事

敵

敵

敵

斯く長尾勢の再びの強し捕へりては  
然るに我勢の日向勇武の者たも  
まゝに東へては死にたはれぬ  
へ通るよあるを死にたはれぬ  
のり方々當りて血戦に神保左衛門  
しつゝ馬景と見るより退きを勝り  
騎千勝の勝るありあはれ討つては  
のりては提督の如く討つては  
と安徳の河原宿の真意なき  
勢勇まるともけ勢ひて退きし

甲

曰酒勢引替りたゞく取用と成るべしとけりしるるるるるる  
 奉よりれと加ふるえ若八所酒造備中大臣朝八所為勇と名ひ  
 切先と抄入迎奉る敵征羅之く其勇も敵をの病と名ひ捷と  
 垂てて討死に為景も勇と名ふる事義の毛の下く敵敵  
 の病と名ふるといふも勇氣煉くととくあつてもたはは蓋獲つ  
 て敵の神保が勇士に濟但馬鎗と揚げる系又討くけるる系  
 眼とくくをの怒くつ湯又開と強と閉上段下段と討ひしる系  
 が運や家と名ふるるるる但馬が槍系を損く勇と胸板と貫てる  
 ようりく煙と煙は湯但馬馳奔る系は勇のく首と面顔愛に長  
 尾勢の中より容顔美繫る若武者敵軍の獲る中二段と出草と  
 て感ふるるよま内おる胃の積と志所添のの槍と引志とこの操と

細本甲走軍言二卷三

見の者定てあるに湯但馬鎗の  
 け若者の速先大く音と圓治大獲馬と馳奔せ以湯と名つて敵大  
 其速先大く音と圓治大獲馬と馳奔せ以湯と名つて敵大  
 形勢宛快も牛若死と名つて見者目と強と獲と滴とく出と  
 けりし神保左京進おとせと見く彼若老の必定為系が尾従るる  
 あつて若武者敵は又悪人つうよもくは出獲て引退とく中勢下  
 敵石燈殿此去つて討くおる若武者も声とけりしやとくは  
 敵と名ふるよま内おる胃の積と志所添のの槍と引志とこの操と

細本甲走軍言二卷三

趣

西景  
一振  
陷元  
死捕  
圖



西景一振



西景一振

錦

口  
時  
後  
し

健  
失  
狂

錦

大  
敵

色ハ事以二十ニこと思ひてその眉と指と擬振し鐵槍を以て其  
と深め紅唇と臍脂と脂しるハ危儀とありや乃系が妻松はとら  
如きりけ其まゝ容態ありしと其も生兵勇力ありて男の勇  
まはる為景村は電愛し幸に戦場は徒ひくをくするを願ふ  
たるが為氣寂期と見ゆる其勇も討死と思ひ定めて復す  
勇威ありて其勇に復し縫殿も松はが為又実報を云松はが勇  
右の本曾我仲が愛妻巴山吹が勇威も珍やと思ふ中へ又神保  
勢見と見えて取田人も夫とを挿へ只遠夫も討つ支雨の  
道は夫と支雨の支差毛の  
まろく疾風の如く馳走つて松は同急に討つて松はも是を寂  
約の成ひとよふ支換は流し

まはるが體自由なるに健忘と見えしは取田のころや  
と健と揚て擬依く竟に松はを生擒て本陣に引ゆる後にけ女  
の勇力と神保をとり取田はあつて幸に取田も討つて  
妻もまたまはるが為の事とさるるありてありし松はの婦の道を  
あつてあまはゆゆと砂ら流し敵國のまはるに従入るなり  
其後自害し死にたりしとぞゆて長尾勢はあつて切為  
遠く討後(近)るもありし松はの妹(近)ゆかき引り切す  
中勢勝はあつて松はの妹は引り人として退するを志す  
大將討死し同より急に入ると討中勢と退つて敗るを  
心く味中へ引金獨り敗兵を集め替く人馬の息を休めゆ  
堅めく討死しるも自ら武勇の同あるを法たさるは討中勢あり



